

◆ INQUA 回想録 1969 年第 8 回 INQUA パリ会議に派遣されて

杉村 新

第四紀学に関する国際会議が最初に開かれたのは、1928 年コペンハーゲンにおいてであった。母体は International Association for Quaternary Research で INQUA と略称された。日本からは、一人も出席していない。しかし、当時日本でも、第四紀学の芽生えがあった。私の先生だった大塚弥之助が 1931 年に岩波講座に「第四紀」を書いていて、この中には、標準年尺度、動植物、人類遺跡遺物、気候変化、地形、造構造史、火山活動史など、関連分野が皆盛り込まれ、総合的方法を述べている。また大塚は、現在からさかのぼって地史を組み立てる独自の方法を取り、「第四紀」を第 2 の「現在」として、さらに過去をさぐった。先見性のある第四紀学の草分けと、私は考える。

国際会議の第 2 回は 1932 年レニングラード、第 3 回は 1936 年ウィーンで開かれた。この頃から、日本人も出席するようになった。戦争で途絶えたが、第 4 回は 1953 年ローマで行なわれた。日本にも INQUA への対応機関として、日本学術会議の地質学研連の中に第四紀小委員会ができ、代表を派遣するようになった。これは INQUA 日本支部であると同時に、国内的には学会のように機関誌も出していた。この小委員会は間もなく発展的に解消し学術会議の中の第四紀研連と、日本第四紀学会とになった。

一方国際会議は、第 5 回 1957 年マドリッド、第 6 回 1961 年ワルシャワ、第 7 回 1965 年ボールダー。第 7 回以来 INQUA は組織を整え、名前も International Union for Quaternary Research と変えた。略称は元通り INQUA である。日本も 1969 年から分担金を払うようになり、そのため第 8 回大会には学術会議から代表 2 名がパリに派遣された。小林国夫氏と私である。この 2 人を含め日本から 11 人が参加した。大学紛争で欠席した人がいたので本来なら参加者はもっと多かったはずである。以下にその時の様子を紹介しよう。



1969 年 9 月 1 日昼食時、パリ大学のレストランで撮ったもの。左隅の後ろ向きは私、向こう側の左が小林国夫氏、右が木越邦彦氏。

第 8 回大会は、1969 年 8 月 30 日～9 月 5 日、パリ大学の校舎で開かれた。54 カ国から出席 760 名（同伴者を含む）、講演数 800（当時まだポスターセッションはなかった）、総会や（各国の）代表者会議のほか、完新世・テフロクロノロジー・ネオテクトニクス・層序学などの委員会が 10 余り、大きな展示室 1、巡検 20 余り。私の感想だが、さまざまな分野の学者がしかも習慣の違う国々から集まったので、パリ大の一地理教室のスタッフだけではさばききれない面もあり、会場の技術的な面で、時には支障を来すことも起った。小さな教室で、聴衆が入りきれないことが多かった。同じテーマの講演が、同時に 2 カ所であったり、専門委員会が開かれている最中に、その専門の講演があったりした。

日本学術会議から派遣されたので、私は会議の議事に加わる義務があったが、英語の聞き取りに慣れていなかったためと、主に課題が INQUA の専門委員会の組織についてで、そういう議論になじみがなかったためもあり、私は議事に加わることができなかった。しかし小林さんが日本代表の役目を立派に果たしてくれたので助かった。

私はこの大会で、日本列島の「第四紀地殻変動図」を発表した。これは、1969 年国立防災科学技術センターが印刷発行したもので、地形学的方法による隆起量図、地質学的方法による隆起沈降量図、集成隆起沈降量図、断層分布図、褶曲分布図、接峰面図の 6 葉からなる。著者は第四紀地殻変動研究グループで、そのメンバーは 10 人、うち主だって作成に当たったのは、8 人（吉川虎雄、杉村 新、米倉伸之、貝塚爽平、成瀬 洋、羽鳥謙三、高橋博、太田陽子）であった。この人たちのおかげで出来上がったのであるが、グループを立ち上げたのと、最後にまとめたのは私であった。

ここから先は私の推測であるが、この発表は、好評だったようで、多分そのため、次の 1973 年ニュージーランドでの INQUA 大会で、私は次期のネオテクトニクス委員会委員長に指名された。私はその大会に欠席していたがネオテクトニクス日本委員の代理を頼んだ貝塚氏が、代りに承諾の返事をしてくれた。私は、その後 4 年間 INQUA のネオテクトニクス委員会委員長を務めたが、松田時彦氏などの助力もあり無事任を終えた。大したことはできなかったが、シドニーで 1976 年に開かれた IGC の機会に委員会を開き、また任期末には各国からの報告書をまとめたぐらいであった。

さらに委員長を務めたことが主な理由で、後に INQUA の名誉会員に名前を連ねることになった。今回 2015 年第 19 回名古屋大会の組織委員会の名誉委員長にさせられているのも、「名誉会員」というのが理由のようである。頼りない名誉委員長であるが、どうか皆様のご協力をお願いしたいと思っている。